

津山城百聞録

今回は、備中櫓の内装について検討しました。今回は少し趣向を変えて、復元整備の実際の工事技法について検討してみます。

現在復元整備工事を進めている備中櫓は、初代藩主森忠政が築造した備中櫓そのものの復元をめざしています。そのため、復元整備にあたっては極力伝統的な工法を使用するという方針で工事を進めています。

備中櫓の基礎は、発掘調査では残念ながらよくわかりませんでした。そこで類例などを検討した結果、復元整備工事では写真1のように内部に礎石を据え付けることにしました。この礎石はすべて今回新たに製作した新材です。礎石を据え付けるにあたっては、発掘調査により内部に江戸時代の遺構が発見されていたので、その遺構を傷付けないように盛り土をした後に施工しています。



写真1 備中櫓礎石の状況

内部に対し、櫓の外周は西・南・東の方向では二の丸から立ち上がる石垣の上に直接建物が載ることになり、北側では地面に2段にわたって埋め込まれた石に建物が支えられる形になります。この北側の基礎石も一部しか残っていませんでしたので、不足分は今新たに製作しています。

これらの工事はいずれも在来の伝統的な工法で行われています。ちなみに現代では

伝統的な木造建造物の復元においても建物の基礎にはコンクリートを使用することが普通なのですが、そのような工法は地下の遺構を破壊する可能性があることから、備中櫓では一切使用していません（建物の浮き上がり防止用の「重し」としてはコンクリートを使用していますが、これは建物自体の構造とは全く無関係のものです）。



写真2 備中櫓土台据え付けの状況

備中櫓の礎石の上に載せられる土台の木材（クリ材）は、上の写真のように江戸時代の石垣の上に直接載っています。石垣の上面（天端面といいますが）、完全に水平ではなくかなりの凹凸があるので、この石垣の面に真っすぐに加工した土台を置いても、すき間だらけとなり安定しません。そこで、写真2のように土台の木材を天端面の凹凸に合わせて加工し、石と土台が密着するように加工します（この作業を「光付」といいます）。この作業は大工さんにとって非常に手間のかかる作業ですが、これによって石の基礎と建物の土台がしっかりと結合するのです。

備中櫓の石垣・礎石と櫓本体の結合は、ボルトなどで固定している場所は全くありません。石垣の上に櫓を置いているだけなのです。

56 津山城備中櫓6 基礎工事について

今年何度となく上陸した台風。とくに台風23号は津山に大きな被害をもたらしました。おびただしい数の倒木や家屋の損傷を目にし、自然災害の恐ろしさを改めて感じながら編集した今月号でした。（e）

私も同感です。それにしても初めて体験するすごい風でした。（e）さん宅は被害がなくてよかったですね。わが家はカーポートの屋根が吹き飛んでしまいました。今ごろどこかのお宅におじゃましているのでしょうか。（郁）

秋を彩る自宅のシユウメイギク（キンポウゲ科）の傍らでアマガエルを丸のみにするシマヘビを発見！驚いたのは、数分で大きな獲物を口へ収めた後、ツートと体の中ほどまで素早く移動させる芸当。改めて生命の営みと食欲の秋を体感しました。（X）

編集後記

今月の納税

介護保険料6期
納期限：11月30日（火）

ひとの動き

（10月1日現在）
人口 90,262人（前月比+38）
男 43,054人（同+6）
女 47,208人（同+32）
世帯数 35,186世帯（同+24）

9月中の異動数

出生 79人、死亡 54人
転入 265人、転出 252人

11月

2004

編集・発行 津山市企画部行政広報室
〒708-8501岡山県津山市山北520
☎0868-23-2111(代) 32-2029(直通) ☎0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp
津山市ホームページ <http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>
(PDFファイルで全紙面を掲載しています)

発行日 毎月10日
印刷 株式会社 廣陽本社

